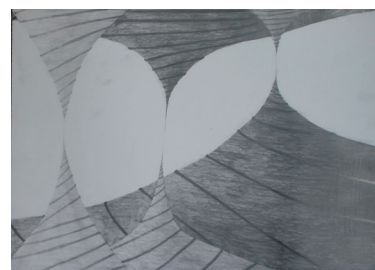
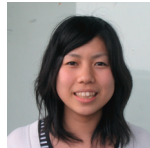


この学生のここを評価する

■来田 亜由美 曲/喜多郎「The Field」

◎評価
この作品は大きな面で構成されているのが印象的です。それぞれの形が、互いにリズムカルな動きを伴って一体となり、躍動感あふれるおどろかな作品となっています。グレーの形の中に描かれた大小さまざまな模様様が小気味よいリズムを表現しています。トーンの階調の美しさも魅力です。



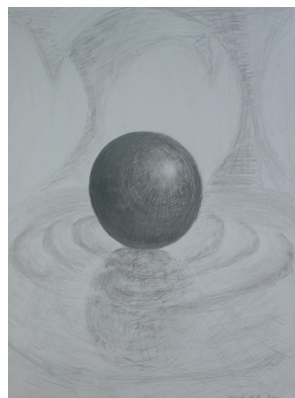
●今後の課題
画面の白い大きな四つの形は、作品に効果をもたらしている一方で、やや単調です。この部分に淡いトーンで描き込みが進めば、一層よい作品となるでしょう。

■渡邊 あかね 曲/BUMP OF CHIKEN「オンリー ロンリー グローリー」

◎評価
この作品は、植物的な生命のある形で構成されています。それぞれの「つる」のような形が絡み合い、伸びやかな動きが、大きなうねりとなって画面に定着しています。そこからは、一種独特な、作者が感じた音楽からのイメージが伝わってきます。



■黒崎 二美加 曲/東京事変「遭難」



◎評価
ほぼ中央に黒々と描かれた球体が、作者が音楽から得たイメージをシンボリックに伝えています。球体の下部への投影、球体から派生する波紋、背景の円が対称的に描かれた構図は、球体を中心とした構想を助けています。



●今後の課題
球体以外の部分の描き込みが単調です。ここを書き込むことによって、曲のイメージを一層確かなものにして下さい。球体の黒々とした表現を大切にしながら、描いてほしいと思います。

洋画コース特集

社会の動きに対応した多彩なカリキュラム

油彩 コンピュータ・アート

現代美術 版画などを網羅

学外でも活発に作品展を開く

美術学科・洋画コースの特集号です。このコースは油彩、コンピュータ・アート、現代美術、版画と多彩なカリキュラムを誇り、学外でも活発に作品展を開いています。美術学科はこのほか美術史・美術理論、日本画、彫刻などのコースで構成されますが、これらは次回に紹介します。美術学科の各コースはそれぞれ自主性を保ちながらも緊密に連携しているのが特色で、学生、大学院生、助手、教員らが肩書きを離れ、自由に腕を競い合う年一回の合同展覧会は名物行事となっています。中村貞夫学科長に洋画コースの現況と卒業生の動向などを寄稿していただきました。

洋画コースの現況

コース主任 中村 貞夫

洋画コースでは油彩画、アクリル、CG、版画と合わせて、インスタレーション、パフォーマンスなども行っています。近年どの分野も大学内外でいろいろな展覧会での発表をはじめ、多様な制作活動が目立っています。入学当初は技術的には色々なレベルの学生がいますが、制作意欲を刺激する教育方法で加速度的に力を付け、今秋、東京都美術館で開催された行動美術展や新制作展に学生3名、大学院生1名、卒業生2名が入選しました。

私はこういう教員、こんな授業をしています

中村 貞夫



絵画の制作は自発性が何より大切です。「水泳」にたとえて言えば、泳ぎ方を教えるのではなく、先ず泳いでもらいます。その上で、自分に適した泳ぎ方を見つけるよう指導していきます。「課題」は、一つの指針と考えています。私自身風景画家ですから、光の捉え方や空間表現の大切さを教えています。又、画材についての知識や技法を実習制作を通じて指導しています。何よりも大切なのは学生一人一人の作品のidentity(存立理由)を大切に、それがどんなレベルであっても個性を尊重したいと思っています。弱点を矯正しようとするのではなく、長所を伸ばす方法を取り、楽しくて効率のよい成長が見込めます。その過程で短所が知らない間に改善されているケースがよく見られます。

■中村先生作品



「インダス川・サッカル・パレージ」167×472cm 2003年
20年計画で4大文明を川を軸にして描いています。ナイル川、インダス川に続いて、現在黄河シリーズを制作しています。いずれも約5m巾の作品30点の連作。

〈卒業生の動向〉

美術系は就職が厳しいと言われていたが、今年の卒業生を対象に卒業式の日に行ったアンケートによると、85%の学生が進学、就職、教職、作家活動など自分の進路を見つけていて、活々とした達成感が伝わってきた。グループ展や公募展での発表のDMを受け取って卒業生達がアートに接した生活をしていることが実感される。又、一旦社会に出た学生が、しばらくして社会人大学院に復帰するケースも目立ってきている。

私はこういう教員、こんな授業をしています

村田 大輔



写実的な絵を油彩でかいていくうち、次第に写真や版画の表現にも興味を持つようになってから、それらの表現を取り混ぜて使う様になっています。

フランスの留学では当初の目的であった絵画技法材料の研究に加え、写真発明の地にて豊富な資料をもとに、古典写真印画法を研究することが出来ました。それらのことは大学における材料演習や模写、版画及び現代技法演習などの授業に反映されております。



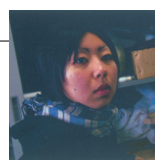
■村田先生作品
「絵を見る」116×60cm
パネル ゴム印画法

この学生のここを評価する

■中村 有希(3回生) 凹紙版画による作品、原版

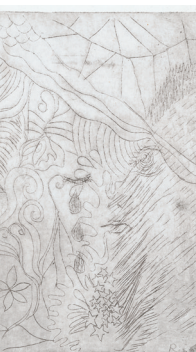


◎評価
かねてよりモノクロームによる作品を主に制作しており、又それらは小さな要素が集積して出来るブロックのような展開をしています。凹紙版による大作にも挑戦しており、より迫力のあるものになっています。



●今後の課題
これまでの試行錯誤のなかで今、シンプルな方法が感情を率直に表現しているのを感じます。

■安田 りさ(3回生) 銅板エッチングによる作品



◎評価
一見して安田さんの作品だとわかる独自性を持ち合わせています。物語性のあるモチーフに色を駆使しての色彩は一冊の絵本を見ているかのようです。



●今後の課題
色彩の多用によりポイントがうすれ易くなる場合もあるため、版画においては色を少しずつ用いていくようにすると良いと思われます。

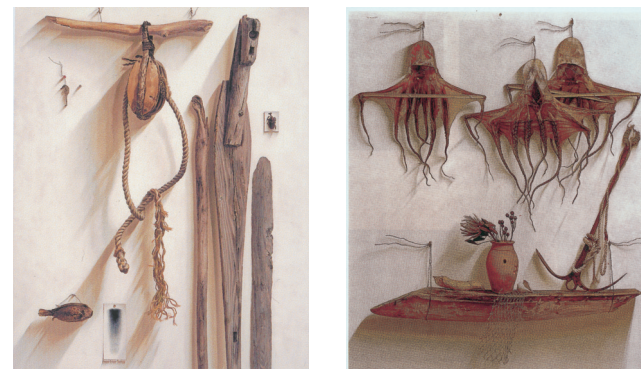
私はこういう教員、こんな授業をしています

加藤 勝久

私は、伝統的で客観性があり誰にも理解しやすく、将来の美術活動のための基礎的な技術が身に付くよう次の授業を行っている。「ドローイング」では、素描の伝統的技法である遠近法と明暗法により形態感・立体感・質感・空間感などの表現を目指して、石膏像と人体をモチーフに演習を行い、「油彩演習」では、ドローイングで培った素描力を活かして、人物・静物・風景などをモチーフに素材の特性である透明・不透明の使い分けや地塗・下塗りの効果を理解して色彩感のある堅牢な画面制作が出来るように演習を行っている。勿論、理解は出来てもその技術を身に付けるには、モチーフをよく観て、無心になって時間を掛けて繰り返し描くことが最良の方法であり、追求することの大切さと描くことの喜びをも知る事ができると思っている。その上で幅広く表現の世界に眼を向け「油彩創作演習」を行い、自分探しとなるであろう「卒業制作」に向かう事を望んでいる。



■加藤先生作品





私の作品のテーマは、西洋画の伝統的な技法を活かしながら、現代的で詩情のある具象絵画の創造にあります。一見して写真のように見えますが写真ではありません。現物をお見せ出来ないのが残念です。

この学生のここを評価する

■新谷 友佳子(4回生) 「女Ⅲ」


◎評価
暖かく流動感のある色彩と固いフォルムの扱いが新鮮である。

●今後の課題
抽象と具象のはざまに独自の新しい可能性を見出してほしい。



■鹿野 有真(2回生) 「Just size」

◎評価
4点の連作のどれも透視法を用いた背景の上に若々しい感覚で人物が描き込まれている。その響き合いが楽しい。



■深田 純平(2回生) 「DNTFGT911」

◎評価
ニューヨークのテロを題材にした反戦をアピールした作品。色彩と構成の強さで、訴えを際立たせた。

●今後の課題
構築性に優れたところがあるが、絵具の処理などに問題が残っている。集中して描くことによって、色々なことを学んでいってほしい。

◎今後の課題
これからもどんどん描き続けることで、新しい活路を見出してほしい。



私はこういう教員、こんな授業をしています

■圓山 茂子

■木村 智博

1年から2年次のコンピュータ基礎演習やコンピュータ・グラフィックス、コンピュータ・ペインティング演習の授業では、Photoshop、IllustratorをはじめPainterを使用した絵画制作をします。特に就職を見据えて、Photoshop、Illustratorに力を入れて演習を行います。



3年、4年では3DCGを含む色々なソフトウェアを使った授業やWeb関係のFlashアニメーションなども学べます。コンピュータで制作した作品は50号や80号に匹敵する大きさにプリントし、その上からさらにペイントやコーラージュ、版画などを追加して油彩に匹敵する強い絵画作品に仕上げていきます。

■圓山先生作品

最近では動く絵画を制作中ですが、この作品は二次元の写真をも三次元のソフトウェアで加工し、テクスチャーにもう一度二次元の作品を使うというソフトウェアを媒体にして制作した作品です。





学生には手間暇をかけるように指導していますが、自分自身の作品は偶然を利用したものが多くあまり自慢はできません。

この学生のここを評価する

■土本 愛子(4回生)

◎評価
宝塚造形芸術大学 春造形展で銀賞を受賞した土本愛子さんの作品「ウィディーWorld」は、一見フランスの画家が描いた風景画のようですが、よく見るとその中に樹木と思われる得体の知れない物体が我がもの顔に浮遊している不思議な光景が表現されています。これらの物体はMAYAというソフトで作成されたものですが、2次元のCGで作成された風景とマッチしてより深い風景画に仕上がっています。

●今後の課題
土本さんは新しいことにいろいろチャレンジするのが好きなので、コンピュータもうまく使いこなせるのですが、作品にあまり執着心がないのが欠点ではないかと思えます。もっとどん欲に作品というものにこだわって良い作品を制作してほしいと思います。

私はこういう教員、こんな授業をしています

■嶋本 昭三



私は兵庫県より西宮に広い土地を提供され、クレーンに吊られて地上30mの高さよりペイントを落としています。日産自動車や様々なテレビの広告に用いられ、今年はナポリより招待されています。これはパフォーマンスですが、同時に絵画制作でもあります。




■嶋本先生作品

この学生のここを評価する

■小國 陽佑(4回生)


◎評価
本年は兵庫国体の年であり宝塚市のスポーツセンター前の壁約80mに本校の学生が参加する事になった。各学生へのまとめと指導を彼が見事にこなした。あとで落書きをされても拭えるようにガラス絵的描画法を採用した。これは裏面より描くため描画の順序が逆になってしまう。彼は見事な写実力で3点出品し、それを見本として他の学生達があとをつづけて壁画を完成することが出来た。



●今後の課題
美術大学では様々な方法でアートの発表の場を準備してくれる。学生の中には卒業して社会人になっても発表の場を与えられるものと錯覚してしまう。多くの発表の場に入り出し、多くの関係者と知り合うことを怠らないように。

■八木 智弘(4回生)

◎評価
透明な板に様々な色彩の糸を円形に張り合わせる作品を海外の展示会などにもよく出品し、よく売れている。叔母に有名な現代芸術家八木マリヨがいることも彼の現代芸術への関心と自信を深めていることも事実である。しかし叔母の作品とは全く関係のない独特の作品をみ出し八木智弘の作品として自他共に認めさせていることはすばらしい。この彼独特の方法を変える事なく更に追求すべきである。



私はこういう教員、こんな授業をしています

■西田 周司



絵は見る事から始まります。対象をしっかり把握出来ない絵は描けません。見えないものは描きようがないんです。だから見る事が大事で、見方、把握の仕方が大切です。ただ絵画にとって最も重要な事は何事にも捉われないことです。自分でも気づかないような感覚をばつと画面に定着させたものです。

dub worldをテーマに作品をコーラージュで制作しています。タブ(レグエ)との出会いは西洋美術の勉強しかしていなかった私の絵の世界の中で強い衝撃でした。さまざまな民俗音楽を通じてアフリカ社会、イスラム世界、ラテンアメリカ、東洋、アメリカ合衆国と自分にはなかったコーラージュされた混沌とした世界へと興味を惹かれました。理解するには多くの知識が必要ですが愕然としながらも、未知の世界との出会いを楽しみました。作品のFresh Dub Worldは肉欲の世界ですが色彩ではFreshを強く意識しています。

■西田先生作品



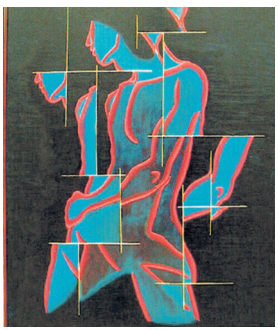
この学生のここを評価する

■古川 光優(4回生)

「命限りある者 その何と強きことか」

◎評価
裸の人体を分解して再構成した作品ですが、暗いバックに赤と青ですっきりと描いています。写真では良く分かりませんがバックの暗い部分が何回も塗り重ねてあって、その上にヴァニス(透明ニス)をこけて塗ってあります。回数を重ねる事で思わずバックの平面性が強まり、しっかりしたもつと素晴らしい絵になります。

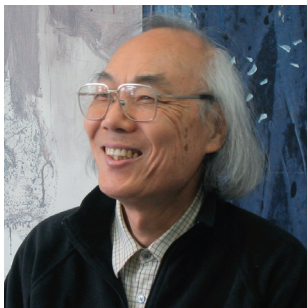
●今後の課題
絵を表現するにはしっかりした支えが必要です。デッサン力がつけば堂々としたもつと素晴らしい絵になります。



私はこういう教員、こんな授業をしています

■高井 道夫

「ドローイング1」では、静物や風景の写生から始まり、裸婦クローッキーなどで造形の基礎を学びます。後期には、発想を重視したドローイングの制作を行います。ここでは、その一つである音楽を聴き、そのイメージを描く「抽象ドローイング」の作品を取り上げました。




■高井先生作品

「生と死」が長年の私のテーマとなっています。この写真は、蛍光色で描いた作品を暗室に並べ、ブラックライトで照明した会場です。現代への警鐘として「海鳴り」をテーマに、

■松田 明久(4回生)

◎評価
工事用のダクトを会場のあちこちに、配置したインスタレーション。現代美術をよく研究し、ユニークである。ネオジャパネスク地球工房展、川西市展 芦屋市展 伊丹0号展はじめ大学でも多くの入賞を果たしている。



絵を描く技術があまり得意でなくても、オリジナルな表現に徹底して表現していけば松田君のように美術界の人達に認められるようになれると思います。



●今後の課題
松田君のようにキャンパスに制作することを主としないうちに、将来絵を売っていくことはむづかしい。催場でのディスプレイや、現代美術の公募展に多く応募して、新しいアートの発表の方法をみつけるべきである。

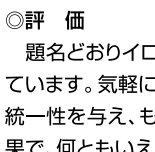



●今後の課題
八木智弘の作品は絵画作品の(タブロー)としても、又ディスプレイのオブジェとしても十分に通用する。出来るだけ多くの会場を訪れ、自分の作品集をまとめてアピールする努力をいとわないでほしい。

■増田 舞子(4回生)

「イロイロ」

◎評価
題名どおりイロイロなモチーフを気軽にいっぱい描いています。気軽に描く事でうさなモチーフに統一性を与え、もう一つの魅力である色彩感との相乗効果で、何ともいえない雰囲気を出しています。しっかり描く事がいいと思われがちですが、退屈になりがちです。

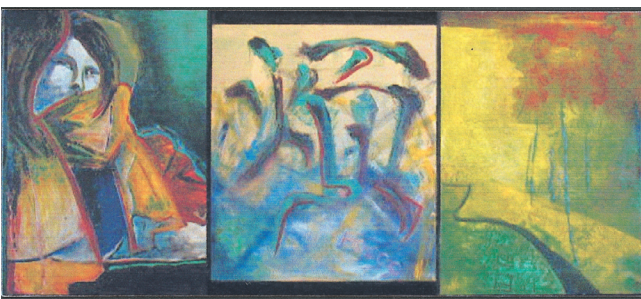
●今後の課題
頼りなげな時は時に魅力ですが、曖昧ではだめです。沢山描いて自信がつけば簡略化でき、すっきりした軽快な絵になります。

■川原 望(4回生)

「煩か何ぞ」

◎評価
全く違ったイメージの作品を思い切って3点くっつけて1つの作品にしています。イメージの違った3点のコーラージュ的面白さとバラバラの表現なのに違和感がありません。何を描いても自分だと聞き直れました。意外な事にかえて自分らしさが表現できました。

●今後の課題
上手くいったからと安心して繰り返して実験すると、想像できなかった本当の自分のイメージに出会うかもできません。



生のダイナミズムを表現しました。暗室に光が浮かび出ることによって、壁の認識が弱まり、開放された空間を演出することを意図しました。会場に海鳴りの音と曲を流し、音楽の効果も試みました。

